

【アイヌ文化】

「異文化との出会い —ジョン・バチラーとアイヌの人々」

カナダ・ヴィクトリア大学
ジョエル・レガシー氏

第九回目の「**Fieldworker**」は、カナダ・ヴィクトリア大学大学院生のジョエル・レガシーさんです。博士論文を執筆するために伊達市噴火湾文化研究所で5ヶ月間にわたる資料調査をされたレガシーさんから、研究のテーマやフィールドとしての北海道・伊達市の魅力についてのお話を伺いました。

—— レガシーさんの研究テーマと北海道に来た理由を教えてください

最初はカナダの歴史を専門に研究していましたが、いまでは日本をふくめた世界の歴史を研究しています。なかでも開拓期の北海道の文化、アイヌ民族と和人の交流などを調べて、博士論文を書いています。

もともとカナダの歴史の研究からスタートしているので、世界の歴史を考えるときには、いつも「カナダの歴史のレンズ」を使います。そうした目で見てみると、北海道の歴史とカナダの歴史がよく似ていることに気づいたんです。

例えば、カナダではおよそ400年前にヨーロッパ人がやってきて町を作り、先住民との交易をはじめました。同じ頃に、北海道では松前藩がアイヌ民族と交易をはじめています。19世紀、1867年に新しい国・カナダが生まれました。日本で明治維新がおこったの

は、その翌年のことです。

ただ、ところどころで重要な違いもありました。そうした違いをカナダ人の立場から見たり、北海道の立場から見たりすることで、いろいろなことがわかつてきます。だから私にとって北海道はとっても面白いところなんです。

—— はじめからカナダの歴史や先住民族について研究しようと思っていたのですか？

昔は若かったので、カナダの歴史や先住民族のことにはあまり興味がなかったんです。ただ、大学でとても親切な先生がいて、その先生と一緒に勉強がしたかった。その先生が先住民族について研究をしていたので、私も先住民族への興味をもつようになったんです。



ジョエル・レガシー
カナダ出身。35歳。
ヴィクトリア大学大学院博士課程。
専門は比較文化論。



—— 具体的にはどのような民族ですか？

カナダの東部に暮らすミグマ（Mi'kmaq ミクマク族とも）という人々です。私の出身地もカナダの東部です。

ある時、私は叔父さんと話をしました。彼は、私たち家族のことを調べていました。というのも、私たち家族の名前はフランス語系なのですが、先祖がどこから来たのかはよくわからなかったからです。叔父さんは本当によく調べてくれました。その結果、私たちの先祖にフランス語系ヨーロッパ人とともにミグマもいることがわかったんです。

私には先住民族の血も流れている。けれど、その時まで私は白人としての人生を過ごしていました。それを知るまでは、先住民族への興味があつただけで、何も知らなかった。けれど、それからは、先住民族の文化交流のことを深く知りたいと思うようになったんです。

カナダでは、こうした関心をもつことは珍しいことです。ふつう多くの人々は、カナダはヨーロッパっぽい国だと考えています。でも、実際には先住民族と混血した人々が沢山いる。そのことを知らないだけなんです。だからこそ、先住民族の文化、先住民族の血、先住民族のことをふくめてカナダの歴史を考えることはすごく大切だと思います。

—— 研究をする時に気を付けていることは？

白人の写真家が撮影したミグマの写真の中に、ミグマの文化がどう写っているのかを研究していました。

例えば、ある白人の女性カメラマンがミグマのリーダーの写真を撮りたいとミグマの町に行きました。そこで撮影された写真に写ったミグマのリーダーは、伝統的なヘッドドレスを身につけていましたが、手には銃を持ち、胸には戦争の勲章をつけていました。この写真には、先住民族の思いと写真家の思惑との複雑な関係も写っていると思います。

写真家の残した手紙やメモの中から、その時のそれぞれの立場や思いがわかりました。写真家はいつも、ミグマの伝統的な文化・モノ（例えば編み物や編みカゴ）と一緒に彼らを撮影したい。けれども、ミグマの人々は別の物と写りたい。写真家から向かれる「ミグマはこういう人々」「これを作ることが大事」というステレオタイプな視線にたいして、ミグマの人々には「自分の文化はちょっと違う」という思いがあったのです。

—— 写真を撮る人と撮られる人の考え方方が違うということですね。

それは「歴史」にも言えます。先住民族の考え方は「歴史」にはあまり書かれません。「歴史」に書かれるのはいつもヨーロッパ人の見方です。だから、そこから先住民族の立場や考えを知ることはとっても難しかった。けれど、本当は先住民族の側から見た歴史も大事なことです。白人の撮影した写真やメモについて調べて、「歴史」に埋もれてしまった先住民族の歴史や考え方を拾い出すことで、彼らの立場をちょっとだけ知ることができたように思います。

—— 日本のことを調べるようになったきっかけは？

学生の頃から日本への興味がありました。友達と一緒に日本についての本を読んだり、お酒を飲みながら話しあったりもしていたんです。だから、大学院の修士課程を修了してから日本へ来ました。当時は旭川で英語教諭をしていたんですよ。

初めて来た時は日本のことをよく知らないので、日本人の人生や文化、神道や仏教などの宗教がすごく不思議なもののように感じて、余計に興味がわきました。それから10年ぐらい経って、日本についていろいろと知っていくなかで、だんだんと理解できる

ようになつたけれど、最初にいだいた興味はいまももちつづけています。

旭川ではアイヌについての英語で書かれた本を読んでいました。けれど、英語で書かれたアイヌの研究は少なかったので、漢字を猛勉強したんです。それなのに、カナダに帰つてしばらくたつと、日本語の本が読めなくなつてしまつた。このままでは、アイヌのことを本格的には研究できないと思いました。

—— 一度帰国したのですね。

はい。帰国してからの2年間はいろいろな仕事をしました。実はその間は日本のこととはあまり考えませんでした。けれど、やっぱり大学院で日本語とアイヌのことを真面目に研究する！と決めて、ヴィクトリア大学の大学院の博士コースに入りました。

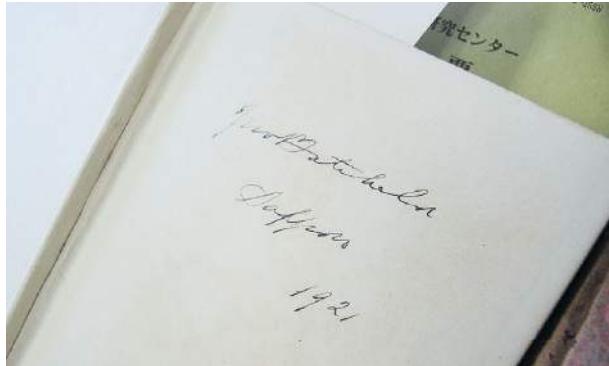
そして、アイヌのこと、アイヌと和人の交流のこと、北海道の近代のことを調べるために北海道大学や道立文書館を訪ねました。その時に伊達市噴火湾文化研究所にバチラー夫妻関係の資料があることを知つたんです。

—— 2012年4月にも当研究所で調査をして、今回は2回目ですね。5ヶ月間にわたつてどのようなことを調べていたのですか？

ジョン・バチラーの書き残したものとおして、彼の考え方を知りたいと思っています。バチラーさんの考え方にはすごく難しいところもあるけれど、とっても面白いです。私は、彼の本の中に答えを探しています。

実は、もっと難しいのはバチラー八重子の考え方です。バチラーさんの本の中に答えがないか探していますが、まだみつかりません。だから、もっと考えなければと思っています。

八重子さんはバチラーさんに比べて複雑な人だと思います。バチラーさんの著書のなかには「アイヌ民族は終わつてしまつた」と書かれているものもありま



す。でも、八重子さんの短歌集のタイトルは『若きウタリに』。八重子さんのかでアイヌ民族は終わつていなかつた。八重子さんはアイヌ民族に未来まで残つてほしいと思っていたんです。だからこそ、彼女は日本の文化である短歌でアイヌ民族の心を詠みました。アイヌ民族のことを知つてもらうために。

八重子さんの胸の中には、アイヌ民族と日本人とキリスト教のことが混在していました。それはすごく複雑なものだから、私にはまだはっきりとは理解できていません。今は「すぐにでも論文を書かなくちゃ。でももっと考えたい」と葛藤しています。

—— レガシーさんにとって、フィールドとしての北海道や伊達市はどのようなところですか？また、これからの目標を聞かせてください。

もちろん、いいところです。伊達の面白さからいうと、私の研究は小さい部分しか見ていません。例えば、伊達武士団の移住のこと。ヨーロッパからカナダへの移住と似ているところもあれば違うところもあります。外国人の研究者にとって、面白いことがいろいろ残つていると思います。

それに、伊達市は北海道の中でも歴史への思いが強いところだと感じます。札幌や旭川には立派な博物館がありますが、市民は歴史のことはあまり考えていないように思つ。それに比べて、伊達市の人々は、歴史をとても大切にしていると思います。

博士論文に書ききれないことも沢山あるので、もっと勉強して、研究を深めていきたいと思っています。

—— 今後も北海道をフィールドとして研究を続けていかれるのですね。それは私たちにとても嬉しいことです。またお会いできるのですね。

私ももう一度会いたいです。カナダで待つてゐる娘と約束しました。今度は家族一緒に行く、って。

(インタヴュー:青野友哉)

